

---

# ダーク・ワールド

pange

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダーク・ワールド

### 【Nコード】

N3063Z

### 【作者名】

pange

### 【あらすじ】

ある日突然、世界が変わった！ 困惑する少年のもとに男がやってきて、過去に戻り、歴史改変を阻止してくれ、なんて言う。だから少年は過去に戻った。未来製の武器を駆使することで、最強の能力者と評されるようになった彼は、歴史改変の真相に近づくにつれて、否応なしに戦乱に巻き込まれていくことになる。

## 第0話 過去へ

ある日、突然世界が変わってしまったら、君はどうするか？  
そして、そのことを知っているのは自分だけだったとしたら。

例えば、そんな質問があったとする。

そんなことはあり得ないから、考えるだけ無駄！  
とでも答えるだろうか。

変わり方にもよるけれど、基本的に大歓迎！  
などと答えるポジティブ精神の持ち主もいるだろう。  
変わるのなんていや！ 今のままでいい。  
と答える現状維持主義者も当然いるだろう。

しかし、この少年はそのいずれでもなかった。

彼が暮らす世界は、本当に、ある日突然一変してしまったのだが、  
その際に彼が示した反応は、困惑だけだった。

少年の世界はとにかく変わった。  
なにがどう変わったのか……といわれると困ってしまうのだが、  
要するに歴史が変わったのだ。

彼がそれに気づいたのは高校で世界史の授業を受けていたときのことである。担当教諭が昨日まで言っていたことと今日言っていることが全く異なっていたのだ。はじめは聞き間違えと思っていたが、教師は何度も、いつもと全く違う、聞き覚えのない歴史を堂々と語

り続け、多くの同級生たちも違和感は抱いている様子もなく熱心に聞き入っていたのだった。

授業が終わった後、彼は友人に尋ねてみた。先ほどの授業はいいかい何なんだ、と。

しかし友人には不思議な顔をされただけだった。

一応、他の友人にも聞いてみた。

しかし、

「はあ？ お前、なに言ってるの？ 三国時代を終わらせたのは魏の後武帝だろうが。晋の武帝？ ああ、そんな奴もいたけど、所詮後武帝に滅ぼされた哀れな篡奪者だろう」

そんなわけのわからぬ答えが当然のように返ってきた。そいつは一応、クラスの中で最も歴史に精通している歴史オタクだったから、その答えに間違いはないのだろう。

どうやら、違和感を抱いたのは自分だけのようだ。おかしいのは自分だけなのだろうか。

そんな風に思いながら、悶々と日々を過ごしていた少年のもとに、ある日、男は姿を現した。

男は言う。

「君は歴史改変の事実を、感覚で認識できる数少ない存在だと。」

何を言っているんだ、こいつは……と、少年は思ったが、男はかまわず続けた。

「君の知っている歴史と、この世界の歴史は大いに異なっているはずだ。それは何者かによって歴史改変が行われたからにほかならないのだ」

「れ、歴史改変……」

「ああ。歴史改変だ。そしてそのことを認識している人間は君を含めて百人もいないのだ」

「……………」  
などと突然言われても困惑するしかない。まあ、実際問題、自分の知っている歴史と、皆知っている歴史には違いが存在しているわけだから、この男の言葉を一方的に否定することもできなかったのだが。

それにしてもこの男は、その事実を自分に告げてどうしたいのだろうか。

「正しい歴史を認識している君には、一つの任務を任せたいのだ」と、男は淡々と言った。

「任務？」

少年が首を傾げると、

「そうだ。任務とは君に過去に戻ってもらって歴史改変者の正体を突き止めてもらい、歴史改変自体を阻止してもらいたいのだよ」

男は答える。

「お、俺が過去に……………」

少年は当然のように困惑の表情を隠せないでいる。過去に戻る。

と、一言で言ってしまうと非常に簡単なことのように思えるが、真剣に考えてみると途方もないことであった。

そもそも、過去になど戻れるのか。タイムマシンが開発されたなどという話は寡聞にして聞かないのだが……………。

「過去には戻れますよ。実に簡単に」  
けれど、男は淡々と言う。

「か、簡単に？」

「はい。痛みも苦しみもなく、短時間でタイムスリップができる技術が既に確立されております。まあ、最高国家機密に指定されており、一般には知られてはいませんが」

自分の知らないうちに世界はだいぶ進んでいるんだと、少年は他人事のように思った。

だが、過去に戻るのはほかならぬ自分なのだ。

待て！

と、叫びたくなる衝動を堪えながら、少年は男をぎろりと睨みつけた。

しかし、男は気にする風もなく、

「まあ、過去に戻るのには君だけではないよ。ほかにも大勢、世界の真実を知る者はいる。その中で年齢的、体調的に最も適していると思われる三十名が過去に戻り、任務に就くことになっている」

「さ、三十人？」

それが多いのか少ないのか、少年にはわからない。だが仲間がいるというのは心強いものだ……と思ってからふと気づく。まだ自分は今行くともなるとも言っていないのだということ。

実際、過去などと厄介極まる所々に行きたいとは思わない。しかも歴史改変を阻止するという重すぎる使命付きで……。イヤだ、と少年が思ってしまうのは無理なきことである。

「無論、報酬は払いますよ。任務達成の暁には一生不自由しないだけの金額を。仮に失敗してもご家族に謝礼を支払います」

失敗だと……。それは死ぬ可能性もあるということか。死。

日本という、まあまあ平和で豊かな国ではそれを意識する機会は滅多にない。少年も基本的に普通の環境に育った日本人である以上、死を意識した経験は皆無であるといっている。

「で、ご承諾いただけますか」

と、男は少年の全身を舐めまわすように見つめながら、そう言った。

それに対して少年は黙り込んだままこう思う。仮にここで自分が「いやだ」と言ったら、この男はどういう反応をするのだろうか、と。

実際、問答無用で承諾させるつもりのか、白々しく確認を求めてくるかは……。

「無言は承諾と同義と受け取らせていただきますが、よろしいです

な？」

男はじつと少年を睨みつける。

「……いいよ、別に」

だから少年は投げやり気味にそう答え、フウと静かに溜息を吐いた。

数日後。

再び普通の日常に戻っていた少年のもとに、男はまたしてもやってきた。

そして、男は言う。

「お迎えにまいりました」と。

そこは学校の正門前。大勢の生徒たちが、黒塗りのリムジンを見やっては驚いたような視線を向けながら、逃げるようにその場から去っていく。

一方、少年は観念したようにがっくりと項垂れてから、

「わかったよ」

と、答える。

「では、こちらに」

男は恭しく頭を下げ、少年を車内に誘おうとする。

そこに、

「あれ、あなた、なにしてんのよ、こんなところで？」

少年を呼びとめる声が響いた。

それは甲高い、女性特有の声である。

聞き覚えのある声のする方角に少年が振り返ってみると、そこには見慣れた少女が友人と一緒にぽつんと突っ立っていた。

「な、なにつて……」

これから過去に戻るために男と一緒に旅立つんだ……とは言えない少年である。

困惑した表情のまま、しどろもどろになっていると、

「ちよつとこちらの少年には、我らのために働いてもらわなければならぬ事情が生じたのです。なに、別にいかがわしいことはありません。なぜなら私は日本国政府の人間なのですから」

男はそう言つてにっこりと微笑んだ。

しかし、

「に、日本国政府？」

少女は当然のように驚いた。まあ、無理もないだろう。普通の高校の門前で、至つて普通の男子高生を捕まえている人間の正体が日本国政府の関係者だと言われて驚かない者がいるとすれば、よほどの変人か、あるいは非常に鈍感な人間だと言えるだろう。

だが一言で日本国政府の人間といつても、男の組織に所属しているかによつて全く意味合いが異なってくる。もしも彼らが情報機関や警察庁の関係者であつたとしたら……。

「いやいや、別に危ない人間じゃないから心配しないでくれよ」

と、男は言つてからからと楽しそうに笑つた。

「だ、大丈夫だよ、里香。またすぐに戻ってくるよ」

少年はそう言つて、友人の少女武田里香に目をやった。

武田里香は「そう」と、悲しそうに頷くと、何を思ったか、静かに少年のもとに歩いていって、首からぶら下げていた首飾りを外すと、彼に手渡した。

「こ、これは？」

と、少年が尋ねると、

「そ、それは私の宝物よ。だ、だから、絶対に返してよね。期限は

……い、一週間よ。一週間なんだからね」

里香は少年の顔をじつと睨みつけた。

「絶対に返してよね。いい。約束よ！」

「あ、ああ」

受け取つた首輪を見つめながら、少年は困つたように微笑んだ。

それからまもなく。

少年は黒塗りのリムジンに乗って学校から立ち去った。

向かった先は、日本政府が国民や議会に完全に秘密で運営している地下研究所であった。

「ここに時間移動するうえで不可欠な装置があるのです」

と、男は言う。

「こ、ここが……」

少年は、映画かドラマ、アニメかマンガでしか見ることができないような光景を目の当たりにして、ひたすらに言葉を失っていた。

「では、行きましようか」

男に誘われ、少年は研究所の中へと足を進めていく。

過去に戻って、歴史改変という驚くべき現象を巻き起こした人間の正体突き止め、歴史改変それ自体を阻止するという、信じられない仕事を果たすために……。

## 第1話 失敗した時間移動

過去の世界。

と、一言で言ってみても、いつの時代かによって意味合いは全く変わってくる。

平和な時代であれば、まあいい。

だが殺伐とした戦乱の時代であった日には……。

任務を達成するより前に死んでしまうこともあり得る。戦争に巻き込まれて戦死するか、スパイと間違われて処刑されるか。

男は言った。

「戦乱の時代ではないはずですよ。」

だが、その表現は曖昧に過ぎて、どれだけ信用してよいものやら分からなかった。

最終的に男は行く先を告げた。

「あなたたちには、古代中国、西暦二七〇年代の世界に行ってもらいます。あらゆる計測と推測の結果、歴史改変者がいるのはほぼ間違いないこの時代です。歴史改変者が誰なのか突きとめた上で、その目論みを阻止することがあなたたちの任務です」

かくして少年たちはタイムスリップし、西暦三世紀という、とてもなく古い時代の中国大陸に赴いたのである。

だが……。

気がついた時、少年の周りには誰の姿もなかった。

三十人以上の同志が、ついさっきまでいたはずなのに……。

どうなっているんだろうと、首を傾げる少年のもとに、

「あ、目、覚めたんだ」

少女のものと思しき声が響き渡った。

「ん？」

少年が辺りを見回すと、確かにそこに一人の少女が突っ立っていた。

年齢的には、十七、八ぐらいだろう。鮮やかな金色に輝く頭髪が特徴的な美少女である。どことなく武田里香の面影があり、心の中で驚く少年であった。

「ここは、どこだ？」

我ながら下らない質問だ、と少年は苦笑いする。

「過去であることに変わりはないわね。でも、どうやら他のメンバーとは違う時代に来ちゃったみたいね」

少女は淡々と答えた。

「ち、違う時代？」

「うん。まあ正確なことは分からないけど……」

「マジでか？」

どこまでも困惑の表情を隠さない少年を前にして、少女は「ははは」と笑った。

「私は、上島晴香。任務名は李卓環。どうぞよろしく」

「上島、晴香、さん？」

少年はまじまじと、少女の顔を見つめる。

「で、あなたの名前は？」

少女は当然のように問うてきた。

「俺は……。名前は相沢晴喜。任務名は……劉英」

一応、古代中国という見知らぬ世界に潜入し、働く以上、彼らには任務名というものを与えられている。上島晴香は李卓環、少年相沢晴喜には劉英といった具合に。

不思議な機械の力で、古代中国の言語も頭の中にインプットさせられている。だから、今、自分が話している言葉が現代日本語なの

か、それともこちらの世界の言語なのか、それすら少年には分からなくなっていた。

「ふーん。劉英、さんね。とりあえずこれからどうしよっか？」

上島晴香……もとい李卓環という少女はそんな風に言っつて劉英の顔をじつと見つめた。

「どうするっつあって……。時代が違うんだろ。だったらここで俺たちができるべきことなんて何もないだろ」

「ま、そうなんだけどさ。でも、どうやって戻ればいいのかとか、それも分かんないんだけど」

李卓環の指摘に、

「マジで？」

劉英は言葉を失った。

「マジだよ」

「……どうすんだよ」

「だからそれを聞いてんのよ」

李卓環に睨みつけられて、劉英は頭を抱え込んでしまった。

本来は任務達成の暁に、元の世界から迎えが来て、元の世界に戻る……というのが基本計画であった。しかし、本来行くべき時代とは違う時代に来てしまった以上、迎えなど来るはずがない。迎えを寄越そうと思っても、彼らは自分たちがどの時代に迷い込んだか分からないのだから、送るに送れないはずなのだ。

「元の世界に戻る方法って本当にないのか？」

と、劉英がぼやくように呟くと、

「あるかもしれないけど、分からないわ」

李卓環は淡々と答えた。

「……じゃあ、とりあえずその方法を探さないといけないわけだな」

「そうね」

「マジでか……」

過去の世界で、未来に戻る方法を探る。

仮に方法があるのだとしても、それは砂漠の中から一粒の砂を探

し出すようなもので、事実上不可能に近い難題であった。

しかし、ここでぐだぐだと時を浪費していても仕方がない。

ひとしきりがつくりと頂垂れた後、劉英はスクツと立ち上がり、歩き始めた。李卓環もまた、その後に従って歩き出す。

劉英と李卓環の二人は、人気の少ない街道をとぼとぼと歩いていく。

行くあてなどない。

何より、ここがどこなのか、二人には全く分かっていなかったのだから。とりあえず太陽の位置から方角を算出した彼らは、北よりは南に行った方がいいだろうという、根拠のない結論を見出し、それに従って歩いているだけであった。

「ねえ、お腹減らない？ あそこに団子屋みたいのがあるけど、よってかない？」

不意に李卓環は、甘い声色で、そんな風に言い出した。

「団子屋？」

一応、お金がないわけではない。この時代の人に通用するかどうかは分からないが、古代中国の通貨だと言われて持たされた金がいくらか、小袋の中に入っている。

「ま、一服ぐらい試してみるか」

劉英は静かに呟いてから、団子屋の方へと足早に歩いて行って、店を守る老婆に、

「試みに問うんだけど、これって使える？」

なんて尋ねながら、手持ちの金を取り出すのだった。

のんびりと、空を見上げながら頬張る団子は、案外美味しく、それを味わっている間だけは、劉英は自分が過去という異世界にやってきているという酷い現実を忘れることができた。

しかし、

「でもこれから本当にどうなるのかしらね。もしこれでここが戦乱の世だったりしたら目もあてられないわね」

などと李卓環が言い出すものだから、劉英は再び現実の前に引きずり出される破目となった。

「戦乱の世、ねえ」

中国史を紐解いていくと、ほとんどが戦乱状態で、平和だった時代の方が遙かに短いのだ。

劉英は、歴史にそれほど詳しいというわけではないが、中国史上で平和だった時代として思い浮かぶのは漢の時代か、唐の時代か、明、清の時代くらいである。それ以外の時代は、常にどこかで戦争が起こっていて、殺伐とした社会だったはずである。

もしここが、そんな戦乱の世であったとしたら。

平和を当たり前のものと思いきや、典型的な現代日本人である二人にはどうすることもできないだろう。

「まあ、武器が全くないってわけじゃないけどね」

と、李卓環が言うと、

「武器って言ってもこれだろ。本当に使えんのかな？」

劉英は、タイムスリップする直前に男から手渡された？武器？とやらの目をやった。

日本国政府が極秘裏に開発した秘密兵器であるらしく、外見はただの指輪にしか見えないのだが、凄まじい力を秘めているのだという。そのほか、拳銃や榴弾のようなものも持たされてはいたが、それだけで殺伐とした過去の時代を生き抜くことができるとは、どうしても思えないのであった。

「ま、いざってときに使ってみればいいんじゃない。タイムマシンを作れるぐらいの技術があるんだもん。よっぽど凄い武器なのよ」……だが、そのタイムマシンも、乗員全員を目標の時代に送り込めない、欠陥品だけだな」

劉英の皮肉に、

「そうね」

李卓環はからからと笑った。

再び二人は歩きだす。

茶屋の老婆曰く、この先へ少し行くと町があるのだという。

とりあえずその町に赴き、宿を借りて、本格的な行動を始めるのは明日から。

そう思って歩いているのだが、これが案外遠い。

歩いて歩いても、町らしいものは見つからない。

「くそ、あの婆め。騙したんじゃないだろうな」

と、劉英はぼやくが、

「この時代の人と、私たちじゃ、少して言葉の概念が違うのかもね。車とかない時代だから、彼らにとってはこの距離も？少し？の範疇に入るのかも」

李卓環は冷静そのものであった。

「なるほどね。……全く、紛らわしい限りだ」

「ぼやかない、ぼやかない」

「フン」

もう何時間歩いたであろうか。

それなのに、町はまだ見えないのだ。

劉英が苛立つのも無理はなかったが、苛立ったところで事態が改善するわけでもないのだ。とりあえず町に向かって歩き続けるしかない。

と、思って歩いていると、

「ふーん。いいカモどもだな」

下品な声がどこからともなく響いて来て、

劉英と李卓環の二人は思わずその場に立ち止った。

このシチュエーション。

見覚えがありすぎて、二人の全身に言いようのない緊張が走っていった。

「と、盗賊か？」

人気のない街道を、二人きりで歩いているところへ現れる粗野な男たち。

マンガやドラマやアニメや映画でよくある光景だ。

しかし、今の二人には護衛などいない。用心棒などいるはずがないのだ。

「そうだよ。俺たちや泣く子も黙る、恐るべき盗賊団だよ。というわけで、金目のもの、全部、俺たちによこしな。素直に応じれば、まあ、命ぐらいは助けてやらんこともないぜ」

と、男たちは言って、劉英と李卓環をじろりと睨みつけた。

二人はというと、困り切ったような顔をして考え込んでいる。

逃げるべきか、潔く応じるべきか、それとも戦うべきか。

武器がないわけではない。

この時代の人間に、拳銃一発でもぶっ放せば、大きな効果が得られるだろう。あるいは、手榴弾を投げれば……。一応、拳銃の撃ち方や手榴弾の使い方などは、教えてもらっているから、使えないわけではない。

だが、この先、何度こんな目に遭うかしれない以上、あまりそう言った有限の武器は使いたくないところではあった。

「これ、使ってみる？」

不意に李卓環はそう言った。彼女が指差しているのは、その右手中指にハマっている、ちっぴけな指輪である。

「これか？」

タイムスリップする直前に渡された、日本政府の秘密兵器。

これがいったいどんな実力を持っているのか把握する意味でも、使ってみるのは悪くないような気はした。

だから、二人は、男に言われたとおりの操作を施し、秘密兵器と

やらを起動してみた。

さて、何が起きるのか。

そんなことは誰にも分からない。

藁にもすがる気持ちの二人が、恐る恐る目を開けた時、辺りは血の色で塗りつぶしたような赤色の輝きに満たされていた。

「な、なんだ、こ、これは……」

と、劉英が呟いた瞬間、

「あ、あれを見て！」

李卓環が悲鳴を上げた。

だから劉英は、彼女が指差す方角に目をやった。

すると、そこには、何もなかった。本来、そこにいたはずの大勢の山賊たちも含めて、何もかも跡形もなく消え去っていたのだ。

どうなったのだ、と思った劉英は、賊たちのいた辺りを凝視してみる。

そして、彼は見つけた。

おそらくは焼けて灰と化した、賊徒たちの哀れな姿を……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3063z/>

---

ダーク・ワールド

2011年12月10日22時47分発行